

## 未来への貯金

学校法人桐蔭学園中等教育学校 3年 井本 由維

消費税が10%に引き上げられたのは、今から5年前。その時私は「払うお金が増えるなんて嫌だな」と思ったことを覚えている。税のイメージが、家のお金を吸い取っていくような否定的なものだけだったことも記憶している。では実際、税とは私たちにとってどのような存在なのだろうか。

私は最近、歯列矯正を始めた。その時、普段の歯科検診よりもずっと大きい額の費用に驚かされた。矯正には医療保険が適用されないため、全て自己負担なのだ。だが、もし病気や怪我で病院にかかった場合も保険が適用されなかったらどうなるだろう。そのお金を払えない人もいるだろうし、病院に行くのを躊躇してしまう人も多いと思う。そうすれば守れるはずの健康が守られなくなってしまふ。それを防ぐのが私たちの納める税金なのだ。

ところで、逆に歯の矯正まで税金で賄ってくれるとしたらどうだろう。個人の支出は減り、矯正を諦めていた人も手が出せるようになるなど数々の利点が生まれる。だがそれは局地的で、一時的なものではないだろうか。様々なサービスに手を回せばすぐに税金は枯渇し、社会保障や道路の整備など、重要な問題に迅速な対応ができなくなってしまう。税金には限りがあるのだから無闇に使っていいものではない。税は集めるだけでなく、使うためのシステムも整っていないと意味を成さないのだ。

フィンランドは、現在国民の幸福度が最も高い国だ。しかし、フィンランドの消費税率は24%で、日本や他国と比べても圧倒的に高い。それなのに幸福度が高いのは何故だろうと思い調べると、税金が高い分社会保障がとても手厚く、税金の七割以上が福祉や保険、教育に使われているという。それに、国民の約96%が納得して納税しているということも分かった。その幸福度の高さはサービスの充実度も当然だが、何より国民が税の使い道を知りその目的を正しく捉えていることも大きいと思う。

税金は未来のための「貯金」だ。人間らしい生活を送ることは、一部の人だけが手にすることのできる贅沢ではない。全員がそういう生活を送るためには、税という柱でそれを支えることが必要だ。以前の私のように、税と聞けば「義務」や「負担」といった悪印象を抱く人は多い。そこで、そのような先入観を持ち続けないために、学校で税について学ぶ機会を設けてはどうだろうか。またそれは税の使途を数値として知るのではなく、一人一人が実例を調べ、見るべきだと思う。そうすることで生活と税金がいかに密接に関わっているかを感じ、「税は負担」というマイナスだけのイメージを払拭できるはずだ。

確かに、私たちと税との付き合いは長く、一生で納める税金は少なくない。でもだからこそ、税の意義を考え、前向きに税と付き合える社会でありたいと思う。